

# 学術界と大学管理運営業務

## 専任教職へのインタビュー調査に基づく社会学的分析

七邊信重（東京工業大学）

### 1. 問題設定

大学を中心とする学術界において、教授・准教授・講師・助教等の「専任教職」は、研究、教育、そして大学管理運営業務（学務<sup>(1)</sup>）に従事している。中でも、学内会議や入試業務等の大学管理運営業務は、専任教職者の業務全体の中で大きな割合を占めているが、研究や教育に関する研究と比較したとき、こうした業務の内容、その業務が日本の大大学教員の業務に占める比率やその要因、研究やキャリアにもたらす影響、近年におけるその変化等について、経験的データに基づき主題的に探究した研究は、管見の限り、あまり多くはない。本研究では、社会科学系の専任教職者に対する調査研究に基づき、学術界における大学管理運営業務の意味について、社会学的視点から探索的分析を試みる。

### 2. 調査方法

2005年度、早稲田大学第一文学部山田真茂留教授による社会学演習「学術フィールドの生きられ方」は、「研究者の生き方」を描き出すという目的のため、2005年5月～10月に、専任教職（常勤の大学教員）30名<sup>(2)</sup>への半構造化インタビュー（1時間程度）を実施した。インフォーマントのサンプリングはスノーボール形式である。インタビュー実施者は学部生25名で、著者もTAとして一部インタビューに参加した。質問項目は、「普段の学期中の研究・教育・その他の業務の割合。その理想・問題点」「専門・所属学科・所属大学それぞれの重要性」「週に担当する授業コマ数」「研究者を志した動機・経緯」「普段の生活」「大学での職業生活の評価」など。インタビューは2ページ程度の資料としてまとめ、インフォーマントにチェック・加筆・修正をお願いし、ゼミで再検討の後、分析結果と共に報告書に掲載した（早稲田大学第一文学部社会学専修（山田研究室）2006）。

### 3. 専任教職の大学管理運営業務

「大学教授の基本的な任務は、研究をすること、教育をすること、大学や学部の運営を担うことの3点に絞って考えることができる」（別府2005: 189）と言われる通り、この3つの業務は、大学教員の中心的業務を占めている。このうち、3番目の大学管理運営業務の内容はさまざまであるが、インタビューデータの他、多田（2006）、榎本（2006）、船曳（2005）、森（2005）、杉原（2010）などに基づいてまとめると大まかに次のように分類できる。

- ① 会議…教授会、学部長会議、委員会など。週1回程度。
- ② 学生指導…生活指導、担任制、欠席者への連絡など。
- ③ 入試業務…問題作成、試験監督、面接、採点、情報開示。学部、学士、修士・博士。
- ④ 入試関連業務…高校訪問、模擬授業、オープンキャンパス、入試制度研究、広報。
- ⑤ 予算等の調達…大型研究資金・予算の申請・管理、ポスト・建物・組織の設置。

こうした業務は研究者の学期中の生活の中でどの程度の比率を占め、またそれはどのように感じられているだろうか。インタビューした大学教員の現実と理想の研究・教育・その他業務の割合の平均を見ると、現実の割合は「2.07 : 4.35 : 3.58」、理想の割合は「5.64 :

3.41 : 0.95」であった。ここから読み取れるのは、学務の割合が 35%を占めていると当事者たちに思われていること、その負担が重いと感じられていることである。

理想的な状態としては、やはり研究が 7 割、教育が 3 割、その他がゼロですが、実際は、精神的なエネルギーの注ぎ方ではなく、時間の取られ具合で考えて、学内的な仕事が 5 割、研究が 1~2 割、講義などの教育が 3 割くらいです。それだけ学内的な仕事に時間を取られているので大学に対しては恨みが強いです。[A-1。インフォーマントは報告書で分類したアルファベットと数字で表記]

学内の業務では具体的に大学の委員の会議があります。この会議は時間が長く、疲労します。会議のための資料づくりには労力を使いますし、大切なことなのですが、こんなことに時間を費やしていいのかという不本意な気持ちもあります。[B-4]

もちろん一方では、大学管理運営業務を、学内における自分の役割と積極的に受け入れる教員も存在するが、多くの教員はこれらを負担と感じている。また近年、学務が増加する傾向があるという声が多く、国立大学の教員からは 2004 年 4 月の国立大学法人化の影響、私立大学の教員からは少子化の影響が挙げられており、①～⑤の大学管理運営業務すべてが研究活動を圧迫している状況が伺えた。詳細な分析については、大会にて報告を行う。

#### 謝辞 :

本研究は早稲田大学第一文学部（山田真茂留研究室）2005 年度社会学演習ⅢB の成果の一つです。データ利用については山田先生よりご許可を頂きました。記して感謝致します。

#### 【注】

- (1) 調査では研究・教育以外の業務を雑務と呼んでいるが、本稿では雑務の下位類型として大学管理運営業務（学務）を位置づける。その他の雑務としては、事務書類（共済保険証の更新、通勤・住宅・扶養手当書類）作成や、大学外での委員などが挙げられる。
- (2) 性別では男性 20 名、女性 10 名。年齢では 30 代 12 名、40 代 14 名、50 代 3 名、60 代 1 名で、23 名の専門が社会学である。本調査では大学院生 51 名への調査も実施した。

#### 【文献】

- 別府昭郎, 2005, 『大学教授の職業倫理』東信堂.  
榎本茂樹, 2006, 「大学教員の生活——その職業生活と私生活の実態」早稲田大学第一文学部社会学専修（山田研究室）『学術フィールドの生きられ方』, 21-28.  
船曳建夫, 2005, 『大学のエスノグラフィティ』有斐閣.  
森博嗣, 2005, 『大学の話をしましょうか——最高学府のデバイスとポテンシャル』中公新書ラクレ.  
杉原厚吉, 2010, 『大学教授という仕事』水曜社.  
多田啓一郎, 2006, 「大学教員の研究・教育・業務（3）研究・教育以外の業務」早稲田大学第一文学部社会学専修（山田研究室）『学術フィールドの生きられ方』51-54.  
早稲田大学第一文学部社会学専修（山田真茂留研究室）, 2006, 『学術フィールドの生きられ方（2005 年度社会学演習ⅢB 報告書）』.